

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

| | |
|---|-----|
| ‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕 | 1 |
| 粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕 | 11 |
| 大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕 | 16 |
| 篋状木製品の用途について〔松澤 修〕 | 25 |
| 縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕 | 38 |
| 近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕 | 42 |
| 長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕 | 51 |
| 石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕 | 57 |
| 集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕 | 79 |
| 近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕 | 85 |
| 1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕 | 89 |
| 2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕 | 94 |
| 3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕 | 102 |
| 4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕 | 110 |
| 5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕 | 122 |
| 6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕 | 130 |
| 7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕 | 136 |
| 8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕 | 149 |
| 9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕 | 157 |
| 10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕 | 164 |
| 栗太・野洲郡のまとめ | 179 |
| 大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕 | 185 |
| 古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕 | 200 |
| 石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕 | 208 |
| 巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕 | 215 |
| 焼物二話〔稲垣正宏〕 | 220 |
| 蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕 | 224 |
| 律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕 | 233 |

日本古代の対外関係史の一様相

| | |
|---|-----|
| -日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕 | 238 |
| 遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 | 243 |
| 新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕 | 252 |

大津市粟津湖底遺跡出土の錘

瀬 口 眞 司

1. はじめに

縄文時代の錘については渡辺誠氏により概要がまとめられている。氏は全国的視野から、錘は縄文時代早期に北アジアから伝播したこと、中期の東関東で土器片錘として大きく発達し始めたこと、そしてこの段階の錘は土器を打ち欠き、縄掛け部に切目を入れたもので浅海河口性のスズキやクロダイなどをとる網に用いたこと、その後東関東から東に伝播して有溝土錘が誕生し、西への伝播の過程で材質変換し中期後半に切目石錘が出現したこと、この材質の変化は獲得漁場の変化、すなわち柔らかい砂泥底の海岸から耐久性が要求される砂礫底の河川への変化に起因したこと、などを想定している。⁽¹⁾

この渡辺氏の仮説は研究の端緒を開いたものとして優れたものではある。しかし、幸いにも資料の増加がみられた現況としては再検討・再整備の必要がある。既に指摘されているように、今日的課題として、各地域における錘の種類やその変遷、それらと遺跡立地の対応関係、推定される魚種相との対応関係などからの再検討が望まれているのである。⁽²⁾

そこで、本稿では大津市粟津湖底遺跡から出土した縄文時代の錘のうち、所属時期が比較的明白な資料を用いて、類型の構成、法量の分布、時期区分との対応関係などを整理する。そしてその結果をもとに粟津湖底遺跡における錘利用の仮説モデルを構築し、近江の縄文時代の漁撈を検討していくための足がかりを作ることを目指したい。

2. 粟津湖底遺跡と出土した錘の概要

大津市粟津湖底遺跡は琵琶湖南端の湖底に眠る縄文時代早期初頭から後期前半頃までの遺跡で、石山貝塚とならび湖南地方を代表する縄文時代の遺跡の一つである。これまでいくつかの潜水試験掘調査が行われた。そして1990年から91年にかけては陸化調査も行われ、現在もその整理作業が継続されている。この陸化調査では、縄文時代早期前半の自然流路・クリ塚、前期後半の落ち込み遺構とその上に広がる包含層、中期初頭の貝塚とそれ以降～後期初頭の包含層が検出された。

錘が出土するのは、現在のところ、前期後半の落ち込み遺構及びその上の包含層、中期初頭の貝塚、それ以降～後期初頭の包含層である。そして今回扱うのは、共伴土器などから帰属時期が特定できた前期後半と中期初頭の総数36点である。

なお、事実記載は紙数の都合から省略的にならざるを得ない。従って、詳細は今後刊行が予定されている報告書に譲ることとし、以下ではまず類別を試み、それをもとに記載を進めることとし、法量などは観察表(表1)にまとめる。

類別は素材と縄掛け部を作り出す技法の差異から行う。まず縄掛け部を作り出す技法からは、敲打による打欠技法によるもの、擦切による切目技法によるもの、双方を用いる打欠+切目併用

技法のものの3つに分けられる。また素材からは石錘と土器片錘に分けられる。そしてこれらの組み合わせから打欠石錘・切目石錘・打欠+切目石錘、打欠土器片錘・切目土器片錘・打欠+切目土器片錘の6つを類型として設定する。

前期落ち込みおよび包含層出土の錘

前期落ち込みおよび包含層は調査区の西部を中心に分布していた。おもに北白川下層式（前期後半）の土器が出土している。まだ細かい検討はされておらず詳しい帰属時期については検討が必要であるが、ここでは現場所見に基づき前期後半の遺構および包含層として取り扱う。なお、前期の落ち込みは流路状の遺構で、包含層はその上部に堆積したものである。石錘と土器片錘が出土し、縄掛け部はすべて打欠技法による。

落ち込みからは、打欠石錘1点（1）、打欠土器片錘4点（2～5）の計5点が出土した。いずれも打欠技法による。

包含層からは、打欠石錘1点（10）、打欠土器片錘3点（6・7・9）、打欠+切目土器片錘1点（8）の計5点が出土した。やはり主体は土器片錘でそれに石錘が加わる構成である。縄掛け部は打欠技法を主体とするが、8は数カ所に打欠を施した後、表面右肩部に切目を施す打欠+切目土器片錘である。

| 図番号 | 類型 | 出土地点 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) |
|-----|-----------|-----------|-------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 | 打欠石錘 | 前期 落ち込み | 89.3 | 59.7 | 13.6 | 76.7 |
| 2 | 打欠土器片錘 | 前期 落ち込み | 93.0 | 69.0 | 5.6 | 52.2 |
| 3 | 打欠土器片錘 | 前期 落ち込み | 102.7 | 65.7 | 6.8 | 66.1 |
| 4 | 打欠土器片錘 | 前期 落ち込み | 85.2 | 64.5 | 7.2 | 56.5 |
| 5 | 打欠土器片錘 | 前期 落ち込み | - | 60.0 | 7.2 | - |
| 6 | 打欠土器片錘 | 前期 包含層 | 88.0 | 69.3 | 10.0 | 74.0 |
| 7 | 打欠土器片錘 | 前期 包含層 | 100.1 | 66.1 | 7.3 | 69.0 |
| 8 | 打欠+切目土器片錘 | 前期 包含層 | 90.8 | 73.2 | 6.3 | 59.9 |
| 9 | 打欠土器片錘 | 前期 包含層 | 58.4 | 48.8 | 6.7 | 22.5 |
| 10 | 打欠石錘 | 前期 包含層 | 53.3 | 46.9 | 15.1 | 45.4 |
| 11 | 打欠石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 69.5 | 44.7 | 16.1 | 69.6 |
| 12 | 打欠石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 80.2 | 43.8 | 12.4 | 58.5 |
| 13 | 切目石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 52.5 | 32.5 | 9.7 | 25.8 |
| 14 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 45.2 | 37.6 | 14.3 | 32.0 |
| 15 | 打欠石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 56.5 | 53.1 | 10.0 | 43.1 |
| 16 | 打欠石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 46.4 | 31.3 | 4.9 | 10.5 |
| 17 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 下層段階 | 46.5 | 36.7 | 9.6 | 24.4 |
| 18 | 打欠石錘 | 中期貝塚 中層段階 | 46.4 | 38.2 | 10.7 | 28.5 |
| 19 | 打欠石錘 | 中期貝塚 中層段階 | 65.9 | 36.6 | 10.9 | 34.9 |
| 20 | 切目石錘 | 中期貝塚 中層段階 | 61.1 | 39.1 | 13.5 | 47.1 |
| 21 | 切目石錘 | 中期貝塚 中層段階 | 67.7 | 32.4 | 11.1 | 36.8 |
| 22 | 切目石錘 | 中期貝塚 中層段階 | 51.3 | 22.8 | 8.5 | 14.7 |
| 23 | 打欠石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 64.3 | 53.9 | 10.9 | 51.3 |
| 24 | 打欠石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 42.9 | 27.8 | 7.8 | 13.3 |
| 25 | 切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 44.2 | 42.7 | 7.4 | 22.1 |
| 26 | 切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 63.4 | 27.9 | 14.4 | 35.1 |
| 27 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 44.2 | 34.5 | 9.3 | 18.5 |
| 28 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 49.5 | 33.8 | 13.3 | 35.7 |
| 29 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 66.0 | 34.6 | 7.8 | 18.1 |
| 30 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 上層段階 | 62.9 | 24.0 | 11.1 | 25.8 |
| 31 | 打欠石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 48.4 | 46.9 | 10.3 | 32.7 |
| 32 | 打欠石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 53.6 | 45.9 | 13.8 | 46.2 |
| 33 | 打欠石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 46.7 | 44.4 | 9.1 | 25.0 |
| 34 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 57.9 | 41.4 | 12.3 | 39.9 |
| 35 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 61.3 | 40.3 | 8.7 | 32.2 |
| 36 | 打欠+切目石錘 | 中期貝塚 区分不明 | 43.8 | 26.7 | 7.9 | 12.6 |
| 37 | 切目土器片錘 | 中期貝塚 区分不明 | 38.6 | 26.6 | 6.1 | 8.3 |

表1 栗津湖底遺跡出土 錘 観察表

なお、土器片錘の周縁の整形方法としては、打ち欠いたままのものときれいに研磨したものがある。前者に該当するのは2・4・9で、後者は3・7・8である。5・6は研磨する部分もあるが部分的で打ち欠いたままの部分

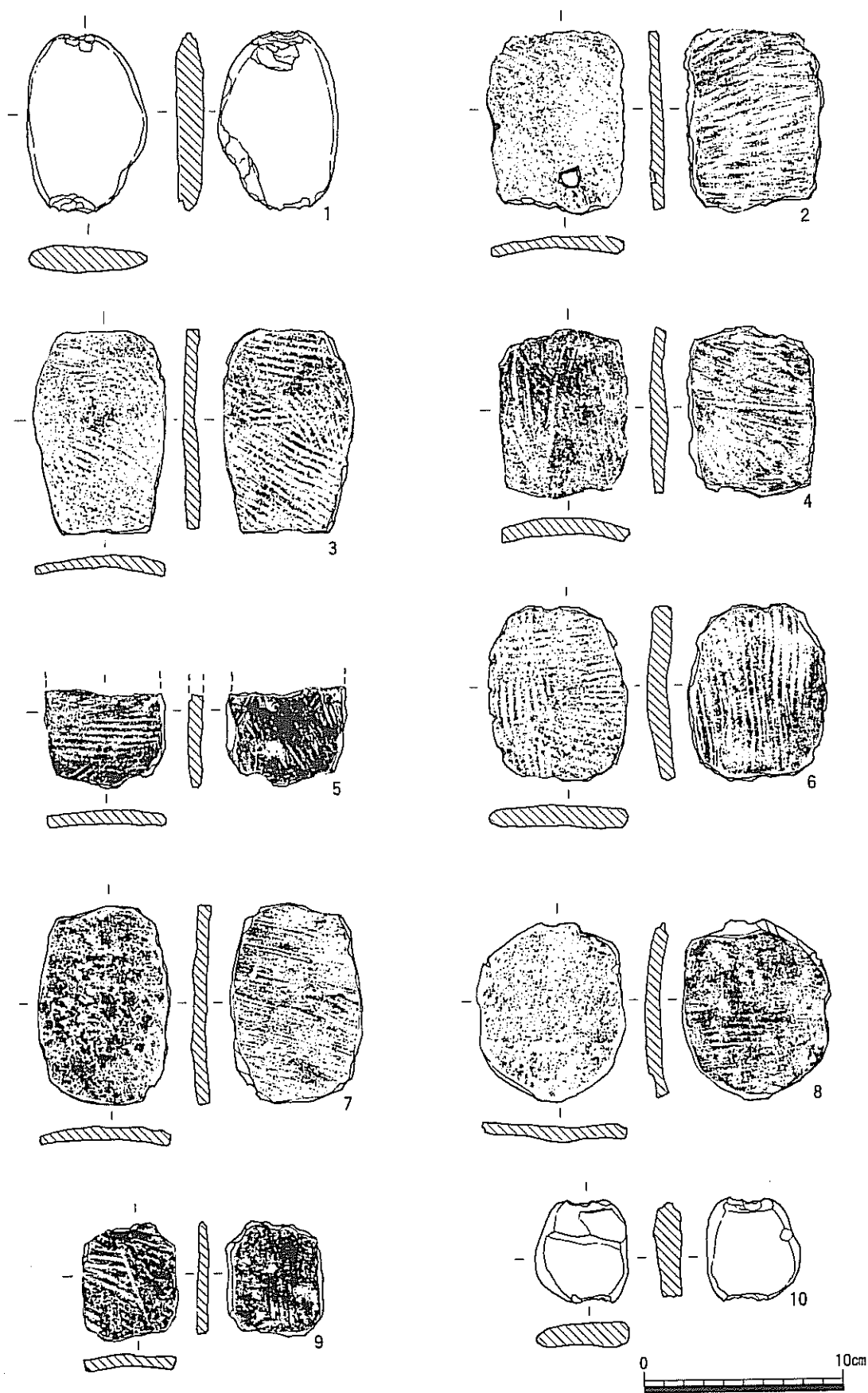


図1 前期の錘

も残る。また、2の上端部、6の右側辺にいくつかの抉状のものが見えるが、これは切目ではなく土器口縁に施されていた刻みである。

中期第3貝塚出土の錘

第3貝塚は調査区の東側に存在していた。出土土器の主体は船元I式で中期初頭の貝塚である。分層数は数百層を越えるので、ここでは下層段階・中層段階・上層段階の3つの層位区分にまとめて概観する。石錘が主体をしめ、縄掛け部には打欠技法のほかに、切目技法もみられる。

下層段階からは6点の石錘が確認された。その内訳は打欠石錘4点(11・12・15・16)、切目石錘1点(13)、打欠+切目石錘1点(17)となっている。

中層段階からは5点の石錘が確認された。打欠石錘2点(18・19)、切目石錘3点(20~22)あるが、打欠+切目石錘は確認されていない。

上層段階からは8点が確認された。すべて石錘で、打欠石錘2点(23・24)、切目石錘2点(25・26)、打欠+切目石錘4点(27~30)出土した。なお、23は左側辺にも打欠を施し、26は左右両側辺に上下2カ所ずつ紐ずれ状の凹みが残る。

そのほか出土地点が不明なものとして31~37がある。これらは貝塚内から出土したものの出土層位区分が確定できないもので、31~33は打欠石錘、34~36は切目石錘である。34は左右両側辺にも打ち欠きを施し縄掛け部を形成する。37は貝塚から出土した唯一の土器片錘である。表裏に条痕がある前期の土器片を用い、丁寧に側辺を磨いたのち切目技法により縄掛け部を作り出す切目土器片錘である。前期の土器片を用いてはいるが、前期落ち込み・包含層から出土したものに比べ非常に小さく、また切目技法しか使っていない点が大きな相違点となっており、現在のところ、出土した貝塚に帰属する中期初頭のものと把握している。

そのほかの漁撈具

前期の落ち込みおよび包含層からは現在のところ確認されない。中期貝塚からはシカ中手(足)骨製ないし角製のいわゆるヤス状刺突具が6本出土している。このうち出土層位区分が明確なのは3本であるが、それらはすべて上層段階で集中的に出土した。

3. 類型の構成と時期(層位)区分の対応関係

本稿では素材と縄掛け部の成形技法の差異から6つの類型を設定した。本章では時期(層位)区分ごとにこれらの構成を整理する。

構成の変遷としては下のようによまとめられる。

- | | | |
|----|--------|----------------------------|
| 前期 | 落ち込み | : 打欠土器片錘4、打欠石錘1 |
| 前期 | 包含層 | : 打欠土器片錘3、打欠+切目土器片錘1、打欠石錘1 |
| 中期 | 貝塚下層段階 | : 打欠石錘4、切目石錘1、打欠+切目石錘1 |
| 中期 | 貝塚中層段階 | : 打欠石錘2、切目石錘3、 |
| 中期 | 貝塚上層段階 | : 打欠石錘2、切目石錘2、打欠+切目石錘4 |

その傾向として、まず、前期では打欠土器片錘が主体であること、中期になると土器片錘自体

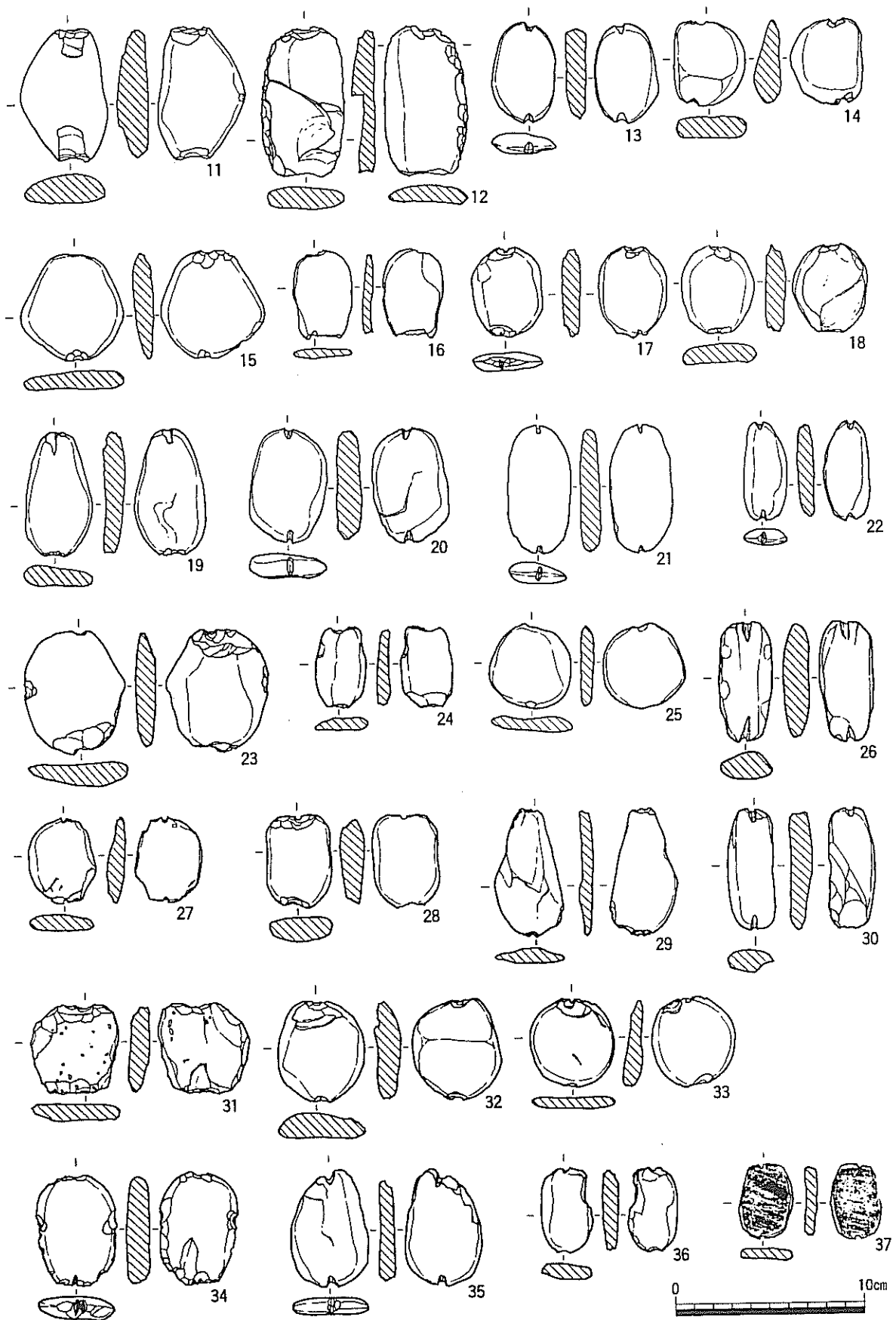


図2 中期の錘

がほぼ消失することがあげられよう。また、切目技法は既に前期包含層の段階で出現し、中期においてもその技法の使用頻度が次第に増加する傾向があることが指摘できる。

なお、切目石錘は中期後半に東日本からの技術的伝播によって出現したものと考えられてきたが、今回の粟津湖底遺跡の調査において中期初頭に既に西日本で存在することが確認された。また、切目をいれるという技法も打欠+切目土器片錘の存在から既に前期後半の段階で出現したこともおそらく確かであろう。従って、この技法の発生、展開などについては再検討が必要である。

4. 法量の分布と時期（層位）区分の対応関係

次に錘として重要な属性である法量（サイズと重量）の分布や平均値をもとめ、それらと時期（層位）区分の対応関係について整理する。

サイズの分布

サイズは最大長と最大幅から導き、その分布を各時期（層位）区分ごとにまとめ、グラフ1に示した。

まず前期落ち込みでは、長さ93mm—幅64mmあたりに分布の中心があり、そのまとまりの中に石錘と土器片錘が混在する。

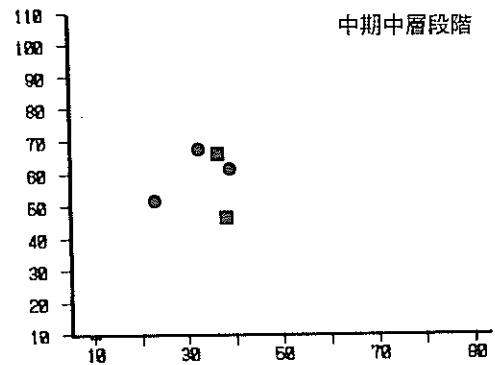
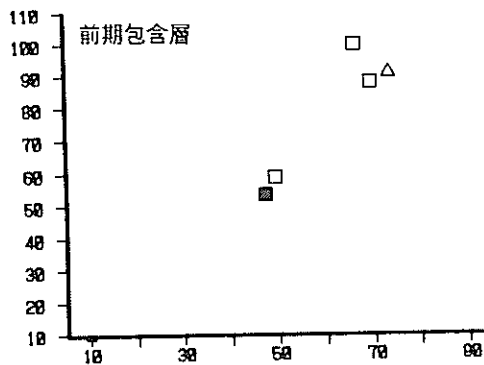
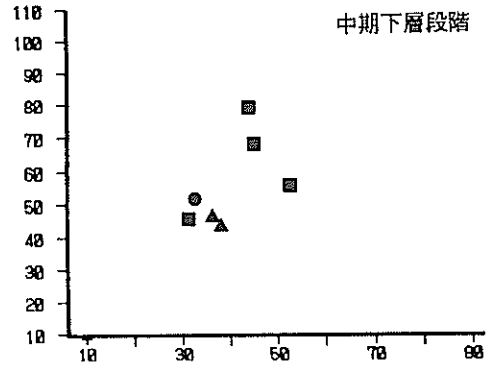
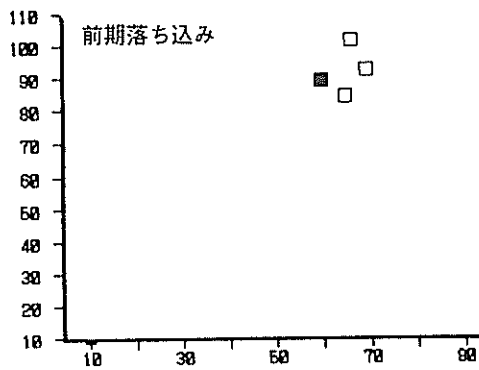
次いで前期包含層では、長さ95mm—幅70mmあたりを中心にまとまる群と、長さ56mm—幅48mmあたりを中心に分布する群に二群の分かれる。前者は土器片錘のみ、後者は打欠石錘と土器片錘が混在する。

中期貝塚の下層段階でも、前期包含層に続き2群に分かれる。一方は長さ69mm—幅47mmあたりを中心に分布し、他方は長さ47.7mm—幅34.5mmを中心に分布する。前者は打欠石錘のみ、後者は打欠石錘・切目石錘・打欠+切目石錘の3種が混在する。

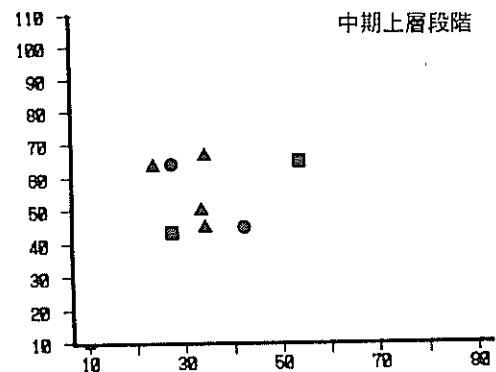
中期貝塚の中層段階および上層段階では、一群しかみられない。中層段階では長さ58mm—幅34mmあたりを中心に一まとまりとなり、上層段階では長さ55mm—幅35mmあたりを中心にまとまる。いずれもそのまとまりの中に各類型が混在する。

| 区分 | 分布範囲の中心 | |
|-----------|--------------|--------------|
| 前期 落ち込み | 長さ93mm—幅64mm | |
| 前期 包含層 | 長さ95mm—幅70mm | 長さ56mm—幅48mm |
| 中期 貝塚下層段階 | 長さ69mm—幅47mm | 長さ48mm—幅35mm |
| 中期 貝塚中層段階 | 長さ58mm—幅34mm | |
| 中期 貝塚上層段階 | 長さ55mm—幅35mm | |

以上のことから、前期落ち込みの段階から貝塚上層段階まで、一貫して縮小化する傾向が指摘できる。また前期包含層および貝塚下層段階では大小2つのまとまりが確認される。なお、類型間のサイズ差としては、ほとんどの区分で混在する傾向がみられ、積極的に差があるとするには若干の困難を感じる。



- 打欠石錘
- 切目石錘
- ▲ 打欠+切目石錘
- 打欠土器片錘
- 切目土器片錘
- △ 打欠+切目土器片錘



グラフ1. サイズの分布
(Y軸：最大長、X軸：最大幅、単位：mm)

重量の分布と平均値

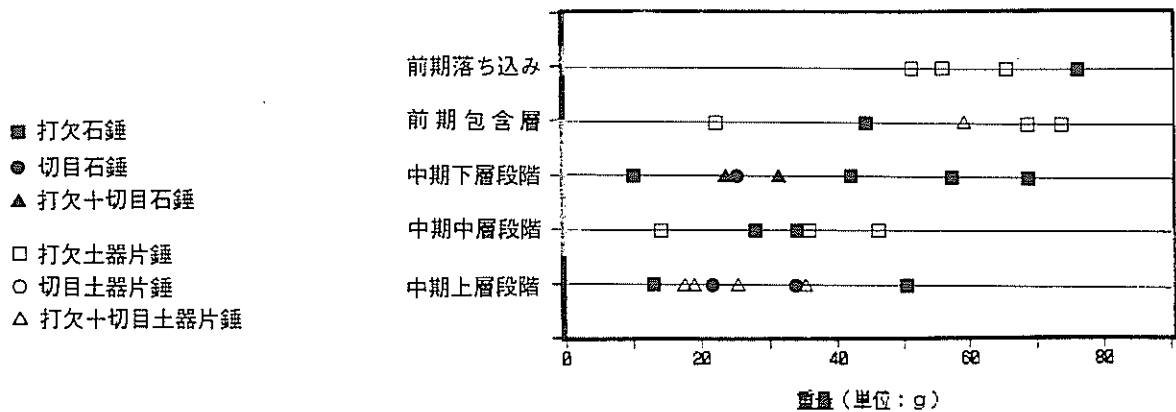
礫石錘すなわち打欠石錘に関して、切目石錘より重いものが多いことから漁網用でなく編物用の錘と考える立場がある。

そこでここでは、分類を再編成し、切目技法を用いない打欠石錘、切目技法を用いる切目および打欠+切目石錘、土器片錘の3つに大別の対比を考慮に入れながら重量の分布と平均値を整理し、グラフ2に表示した。

前期落ち込みの重量分布は76.7g～52.2gの範囲で、平均値は62.9gである。土器片錘に比べ唯一の打欠石錘はやや大きい値にあるが、資料数が少ないためその差異については言及をさげねばならない。

前期包含層の重量分布は74.0g～22.5gと範囲が広い。平均値は54.2gである。唯一の打欠石

グラフ2. 重量の分布



錘はやや小さい値にあるが、やはり資料数が少ないためその差異については言及をさしておく。

中期貝塚の下層段階の重量分布も69.6 g ~ 10.5 g と範囲が広い。平均値は37.2 g であるこの段階だけは打欠石錘がほかより重い傾向にあるものの、最小値も打欠石錘であり類型差と単純に関連づけることには躊躇する。

中期貝塚の中層段階では47.1 g ~ 14.7 g の範囲に分布し、その平均値は32.4 g である。また、上層段階の分布範囲は51.3 g ~ 13.3 g で平均値は27.5 g である。いずれも打欠石錘とそれ以外は混在する。

| 区分 | 重量分布の範囲 | 平均値 |
|-----------|-----------------|--------|
| 前期 落ち込み | 76.7 g ~ 52.2 g | 62.9 g |
| 前期 包含層 | 74.0 g ~ 22.5 g | 54.2 g |
| 中期 貝塚下層段階 | 69.6 g ~ 10.5 g | 37.2 g |
| 中期 貝塚中層段階 | 47.1 g ~ 14.7 g | 32.4 g |
| 中期 貝塚上層段階 | 51.3 g ~ 13.3 g | 27.5 g |

以上のことから、重量からも一貫して軽量化する傾向が指摘できる。また類型間の重量の差異としても、ほとんどの区分で混在する傾向がみられ積極的に差があるとは言いがたい。

5. まとめ

ここでは、前期から中期にかけての変化、およびそれぞれの仮設モデル、今後の課題をまとめておく。

変化としては、まず素材の選択において土器片錘から石錘という変換がみられた。また縄掛け部の技法においては、打欠技法主体から切目技法・打欠+切目技法の付加がみられた。なお切目技法の出現は、打欠+切目技法という形ではあるが前期包含層の段階に既にあった可能性が指摘できた。さらにサイズとしては縮小化、重量としては軽量化がかなり明確に指摘できる。

なお、いわゆる打欠石錘 (= 礫石錘) とそれ以外の錘は、重量やサイズにおいて混在する傾向がみられた。また同一個体内に打欠技法と切目技法が同一個体中に併用されているものも少なくない。従って、切目石錘が漁網用のものと認識されている現在の学史的成果に対照するなら

ば、粟津湖底遺跡における打欠石錘も漁網用のものとする⁽³⁾ことが出来よう。

さて、目的の一つであった仮設モデルは以下のように設定しておく。

粟津前期後半モデル

打欠石錘・打欠土器片錘・打欠+切目土器片錘を使用。打欠土器片錘が主体。石錘と土器片錘の間に顕著な法量の差異はみられない。

平均的な法量はおよそ93mm×65mm前後、65g程度。ただし、後におよそ56mm×48mm、34g程度のものが付加される。いずれもサイズの分布は集中する傾向があり規格的である。

粟津中期前半モデル

打欠石錘・切目石錘・打欠+切目石錘・切目土器片錘を使用。石錘を主体とする。

平均的な法量はおよそ56mm×36mm前後、32g程度。サイズの分布は前期ほどではないが集中する傾向がある。

ヤス状刺突具の併用が確実で、土器片錘はほとんど使用しない。

今後の課題としては、まず粟津湖底遺跡の錘における変化の背景の把握があげられる。今回の検討だけでも、材質の変換、法量の縮小化・軽量化といった変化が見出せた。これらは、獲得の場の変化、水深・流速・水質といった環境の変化、それに影響される獲得魚種の変化、あるいは漁法や網の構造の変化（個数と重量の相関関係）など様々な要因が考えられる。この課題の追求方法としては、まず粟津湖底遺跡中期貝塚（＝第3貝塚）における出土魚類の種組成や体長組成、それらの変化との対応関係の検討が不可欠であろう。ほかの遺跡では出土遺存体の対応関係は不可能だけに十分かつ丁寧な検討が望まれる。

また、近江における各遺跡に対しても、同様な検討を加え仮設モデルを設定していきたい。近江における縄文漁撈を考える上で、この仮設モデルと時期・地域・環境（から導かれる推定魚種相）との対応関係の検討は必要不可欠であろう。そして、これらを成し遂げたとき、獲得方法やその環境の復元だけでなく、漁撈という生業からみた遺跡の消長や、地域の斉一性・独自性などの一側面も見えてくるのではないかと考えている。

註

- (1) 渡辺 誠 『縄文時代の漁撈』雄山閣 1973年
渡辺 誠 「漁業の考古学」『講座・日本技術の社会史 塩業・漁業』日本評論社 1988年
- (2) 上野修一 「栃木県における縄文時代の網漁について」『栃木県考古学会誌』第7集 1983年
上野修一 「那珂川流域の漁網錘」『季刊考古学』25号 1988年
山本直人 「加賀における縄文時代の網漁について」『石川県考古学研究会会誌』23号 1982年
山本直人 「北陸地方の漁網錘」『季刊考古学』25号 1988年
伊藤禎樹・篠田通弘 「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐる）」『岐阜史学』76号 1982年
- (3) (2)前掲の伊藤禎樹・篠田通弘氏論文中でも同様な指摘がなされている。

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀要 第9号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668